

# 青森の四季の美しさを感じつつ、思うこと

青森労働局長 瀧原 章夫



以前に在フィリピンの日本大使館に3年間ほど勤務していたのですが、赴任して間もない頃に、大使館勤務の先輩方から任地でのいろいろな体験談を聞いていて、ふと不思議に思ったことがありました。話の内容は明確なのですが、なぜか、その出来事が何月にあったかの記憶が皆さんあやふやなのです。

その理由は、しばらくしてわかりました。フィリピンは常夏の国で、年中日本の8月のような気候なので、何月くらいという記憶は残りにくいようなのです。確かに、日本での出来事は「あの時は暑かった」、「紅葉がきれいな時期だった」、「雪で大変だった」などなど、その時の季節と一緒に思い出すことが多いことに気づきました。四季のある気候が、人の記憶にも影響しているんだと改めて認識したのを覚えています。

フィリピンの人々は、おおらかでのんびりしたところがあるのですが、それは、ずっと暑い夏が続くという生活の中で、「今日やらなくても明日やればいい」という風土からくるものと思います。

一方で、日本は、四季が移り変わりますから、「今やらないといけない」、「いつまでにやらないといけない」という生活のリズムになります。特に、青森県は冬の寒さが厳しいです。季節の変化への対応は他県よりシビアであり、働ける時にしっかり働くというメリハリのある活動をしなければ生活できなかったでしょうから、そうした中で、勤勉さに代表されるまじめな県民気質は育まれてきたのではないのでしょうか。

しかし、現代に生きる人々は、この季節感を失いつつあるように思います。日々の生活は、科学技術の発達でとても便利になりました。ライトで夜も明るく、エアコンで季節を問わず快適、インターネットでどこにでもアクセスでき、コンビニがあるので夜中でも食

べ物を買えます。24時間いつでも働くことができる環境とも言えるもので、これが日本人のまじめさと相まって、「KAROSHI（過労死）」という言葉が海外で通じるまでに、働き過ぎが我が国の大きな社会問題になってしまいました。

日本人の「勤勉さ」は、本来、四季の移り変わりの中で、働くべき時にしっかり働くというメリハリのあるものだったはずが、便利さとともにダラダラ働き続けることになってしまったように思えます。

今や日本は人口減少社会となり、限られた人的資源で社会を支えていかなくてはなりません。そのためには、働く時間と休む時間、仕事する時間と家庭での時間を明確にして、働くべき時間に集中してしっかり働くというライフスタイルの構築が不可欠だと考えます。これがまさに、今の社会に求められている「働き方改革」なのです。

そして、それは、厳しい季節の変化の中で勤勉に働いてきた青森県の本来の姿ではないかと思えます。県民の勤勉さの原点であるメリハリのある働き方を日々の労働の中で実践することで、この地において、これからの社会のあるべき働き方が実現できるのではないかと期待しております。

この夏に青森に転勤となり、ねぶたなど地元の祭りを楽しませていただきましたが、そこには、厳しい冬を耐えてきた人々の思いが夏に一気に爆発する素晴らしさを感じました。これぞ生活のなかのメリハリですね。今は秋の祭りも終わり、山の木々が彩豊かに輝いています。この美しい季節が過ぎると、北国の厳しい冬がやってくるとのこと。初めて経験する青森の寒さにちょっと不安を感じつつ、それを乗り切った後の桜が楽しみな今日この頃です。